



ガハテ村通信

篠山ナマステ会 兵庫県篠山市住山420 TEL (079) 595-1365 振替口座 00930-6-29629



手作りのポスターでセティディビ小学校への募金協力を呼びかける
ニュー・インターナショナル・スクールの児童たち

支援の輪、新たに広がる 東京の子どもたちが募金で協力

昨年のネパール・スタディツアーに参加した留田純子さんから、うれしい知らせが届きました。

留田さんが二月に、勤務する「ニュー・インターナショナル・スクール」(東京都豊島区南池袋)で五歳から七歳の児童にセティディビ小学校について紹介したところ、児童たちは留田さんも知らない間に授業を元にポスターを手作りし、他のクラスを回って協力を呼びかけ、募金活動をしてくれたのです。

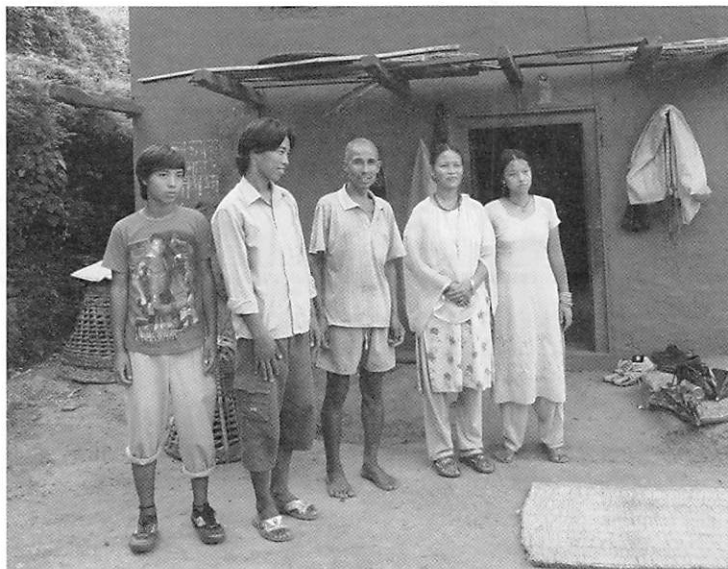
集めてくれた約四百ドルは三月にSSを通じてセティディビ小学校へ送金しました。また、手紙も送ってくれていて、今は返事を心待ちにしているそうです。

ガハテ村からPHD研修生が来日

ビショジツトさん 総会で村の現状を報告

平成二十一年度のPHD研修生として選ばれたガハテ村の二十一歳の青年、ビショジツト・ラマ・タマンさんが、四月十五日に来日しました。

ビショジツトさんは二〇〇八年に高校を卒業し、家族とともにガハテ村で農業に従事してきました。ビショジツトさん自身はセティデイビ小学校の卒業生ではありませんが、彼の父は当会のカウンターパート・SSSの協力者であり、小学校ができるま



PHD研修生として来日するビショジツトさん(左から2人目)とその家族

では建設委員会、その後も運営委員会の委員を務めてきた人です。

ビショジツトさんはヒンズー教徒で、牛肉は食べません。タマン語とネパール語を話し、来日に備えてカトマンズの学校で日本語の特訓を行ってきました。これから神戸YMCAでさらに六週間の日本語研修を受け、その後一年間かけて各地でさまざまな研

平成二十一年度篠山ナマステ会総会

日時 平成二十一年四月二十五日

開場 一三時

開会 一三時三〇分

場所 四季の森生涯学習センター(篠山市網掛)

東館1F大会議室

規約改正のほか、今夏に予定しているネパールスタディツアーでの小中高校生への派遣費用補助などを提案します。

記念行事 第十三回ネパール市民講座

「ガハテ村からの報告」

講師 ビショジツト・ラマ・タマンさん

通訳 増岡シヨバナさん

なお、スタディツアーは昨年と同様、PHD協会との共催とし、七月二十日(月)～二十九日(水)の日程で計画中です。

修を積むこととなります。研修の主なテーマは有機農業、保健衛生、住民組織化ということです。当会とのつながりから、例年の他国からの研修生よりも篠山市での研修が多くなる予定で、みなさんの支援、協力をお願いします。

また、今年度の当会の総会后、記念行事として第十三回ネパール市民講座「ガハテ村からの報告」と題して講演をお願いしています。セティデイビ小学校の現在の様子やガハテ村の農業や暮らしなどについて、文字通り「生の声」が聞けるチャンスです。ぜひ、来場ください。

人権フェスタinささやまで

1面で紹介したとおり、東京の子供たちからうれしい知らせが届きましたが、篠山市でもこんなことがありました。

昨年十二月五、六の両日、篠山市民センターで開かれた「人権フェスタinささやま」でのことです。当会は今年も参加し、昨年夏のスタディツアーで撮影した、セティデイビ小学校とガハテ村を中心とした写真パネルを展示。六日にはネパールグッズや文具、日用品、カレンダーの販売も行いました。

売り場には募金箱を設置していましたが、一人の男子中学生が募金箱の前に立ち、自分のポケットをたたいてお金を入れると、何も言わずに立ち去りました。それを見ていた女性が、「こりゃいいかん、いかん。大人がすたるやん」とあわてて募金してくる場面も。

人権フェスタでは、バザーと募金を合わせて一六、四四五円が集まりました。この浄財は、ご協力いただいたみなさんの「心」を添えて、しっかりネパールへと届けます。(山)

ビシュヌマニ通信

篠山ナマステ会の通信員、ビシュヌマニ・ネパールさんからのEメールを紹介します。



東京からの募金に感謝

はじめに、ニュー・インターナショナル・スクールの皆さんのご協力に心から感謝いたします。私はちみさんが三月六日にSSSの銀行口座に振り込んでくれた寄金を三月十六日に確認いたしました。この寄金はSSSとセティディビ小学校とで相談し、文房具に活用することを決めました。ノート、鉛筆、鉛筆削り、消しゴム、三角定規・コンパスセットなどを全児童に贈ります。私たちはみんな大変うれしく思っています。

苦悩する連邦民主共和国 ネパールの現状について

昨年五月、王制から共和制に移行したネパールは、多くの課題を抱えながら、遅々としてすすまない国づくりに苦悩している。(小)

●新憲法の「民主」と「連邦」

最大の課題は、国家の屋台骨である新しい憲法を

学校、村について

セティディビ小学校は三月十二日から二十日にかけて、年度末試験を実施しました。教員と児童はそれぞれのやるべきことに頑張っています。試験が終了すると、学校は三週間の休みになります。現在の教員数は、校長、男性教員三人、女性教員二人で、校務員が一人です。

二月のガハテ村の農家は忙しく、ジャガイモと小麦の収穫をしました。ジャガイモは売ってお金を稼いでいます。また、村人の間では水牛や雌牛を飼うことが広がってきており、牛乳を売ることによって多少のお金も稼いでいます。

停電続き生活に支障

世界的な経済危機の影響で、ネパールではあらゆる商品の値が上がり続けています。日本でも同じような状況が生まれているのでしょうか。

ネパール政府は八時間しか電気を供給できておらず、毎日残りの時間は電気を使うことができません。このため、私たちは日常の仕事をすることも困難な状況に直面しています。

制定することであるが、「連邦」や「民主」の具体的な姿について国民的合意がまだ生み出されてはいない。特に「民主共和制」については、議会で最大多数を占める与党のマオイスト(ネパール共産党統一毛沢東主義派と改名)内部でも「議会制民主主義」を認めるのか否かで意見の対立があり、複数政党制による「議会制民主主義」を掲げるネパール会議派とも意見は対立したままである。マオイストは、武装闘争を推進して国王・政府から独立した「自治州人民政府」を樹立し勢力を拡大してきたが、この中から民族による連邦制度の発想

が生まれた。すでに国内の一部にはこの「自治権」を求める運動が進んでいるといわれる。

しかし、最近、マオイストの現職大臣の中から「民族に基づく州制度」への批判が出るなどして、「連邦」についても国内は勿論、与党内でも意見がまとまっていない。

●国軍とマオイスト軍の併合

そして和平プロセスの最大の難関といわれるネパール国軍とマオイスト軍との併合の方法についても、明るい展望は生まれていないようだ。マオイスト軍のほぼ全員が国軍への併合を望んでいるのに対し、与党を構成している他の政党からはそのような「グループ統合」に反対の声が上がっており、両者の溝は容易に埋まりそうにない。

このほか、十年以上に及ぶ内戦で一万三千人以上の生命が奪われているが、さらに、政府軍やマオイスト軍に拘束された後に行方不明になっている人が、赤十字国際委員会に登録されているだけでも千二百人を超えていると言われる。これらの真実の究明は民生が安定するためには避けて通ることができない問題であるが、まだ十分にその解明は進んでいないようだ。それに経済はここ数年インフレの傾向が強まっている。

●「ガハテ村づくり」への協働

ただ幸いなことに、私たちが支援と交流に取り組んでいるカブレ郡や隣接するシンドウバルチョーク郡は非常に落ち着いてきており、外務省の「渡航(危険)情報」も一ランク下げられた。セティディビ小学校の運営は軌道に乗っており、ガハテ村の人々は雨季の到来を待つて農業に勤しむ準備を整えている。ネパールは、今まさに、新生国家の産みの苦しみに呻吟している。篠山ナマステ会は村人と共に、「ガハテの村づくり」を通して、今後ともネパールの「国づくり」をしつかりと見つけていきたいものである。

地域活動の報告



シンポジウムのパネリストのみなさん。
来場者とも熱い議論が交わされました。

交流のあり方議論 シンポジウム開く

第十二回ネパール市民講座を一月三十一日、篠山市民図書館で開きました。今回は「私のネパール見聞録 生きることは」と題し、ネパール訪問経験のある四人のパネリストを招いてシンポジウムを行いました。

パネリストは、当会から昨年ネパールスタディツアーに参加した中西節さんと林庸子さん、青年海

外協力隊員の村落開発普及員としてネパールで二年間生活したJICA兵庫の藤善奈美さん、PHD協会で研修生の受け入れを担当し、平成二十一年度の研修生の選考会でガハテ村を訪れた経験のある高垣隆博さん。コーディネーターは当会の向井祥隆さんが務めました。

パネリストからは、満ち足りた日本では失われつつある好奇心や恥じらいの心を現地の子供たちに見て感銘を受けたこと、現地の生活を目の当たりにしたことなどで日本での自分の生活を見直す機会になったことなど、ネパールでの経験から感じたことが述べられました。



三田市で篠山ナマステ会の活動を紹介する小嶋事務局長

国際交流について講演

三田ユネスコ協会で

当会の事務局長を務める小嶋英毅さんが一月二十四日、三田ユネスコ協会の国際交流講演会に講師として招かれ、「この子の命が輝くために私たちに何ができるか」と題して当会の活動について講演しました。

まず、長年ネパールで医療活動に従事した岩村昇博士、岩村博士が帰国後に提唱した草の根の交流を通して平和と健康を担う人づくりすすめるPHD運動など、当会設立の原点について説明。岩村博士の声に篠山の有志が応えて「たんば農文塾」ができ、そこから現在に至るネパールとの深いつながりが生まれたという経緯を話しました。

また、セティディビ小学校の建設から竣工に至る過程や、小学校の運営が軌道に乗り出し、それにより村人たちの意識にも少しずつ変化が現れてきたことなどを、写真を交えながら解説。会場の三田市中央公民館には百人余りの参加者があり、熱心に耳を傾けていました。

来場者からも活発に意見や質問が出されました。ミャンマーで井戸掘りの協力を行っている人や、バングラデシュで教育支援を行っている人もあり、それぞれの立場での貴重な話を聞くことができました。また、「支援する側」と「される側」で対等な立場ではなくなっているのではないかとという疑問や、開発や生活改善という名のもとで文明を持ち込むことの功罪など、交流を続けていく中で直面している様々な問題について意見を交換。さらに、豊かになった一方で多くの問題を抱えてしまったわれわれ日本人が、「反面教師」として何を伝えられるか、どうかかわり合っていけばいいのかなど、熱く議論されました。